

6/6(土)まじで！倫理です。今週通の「今週の倫理」となっています。
歩になりきる... 毎日のいかなる歩でも喜ぶ... 歩の心！

幸也流！アホ一鳥

2020.6.6~6.12

今週の

倫理

6月のテーマ | リーダーの自覚

1180号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

将棋で長を王将にたとえるなら、一般人たちは歩だと思う。飛車、角、金、銀その他のいろいろなものがあるわけだが、歩という駒は、一つだけしか先に進めず、横にも後にもさがれない、いわばもともと能力の低い駒である。しかし将棋の格言というものがある。歩の中に、「歩のないう将棋は負け将棋」というのがある。

たしかに王将ばかりでは将棋にはならぬ。もともと数の多い歩、これがたいせつなのだ。会社でもどこでも、長ばかりではしやうがないのだ。それよりも歩になりきる心、これが重大ではないか。一步一步と確実に進む。断じて後にはひかないぞというその気概。これで毎日の仕事をしつかりとやっいていく。間ぬけといわれようが、のろまにあざけられようが、馬耳東風とばかりに、ぐいぐい仕事にうちこんでいく。長のいうことはきくが、長の地位を狙っているのではない。一兵卒でもよい。最前線にあつても、強い相手のまっ正面にとり組まされてもよい。地位は最下位でもよいから、とにかくなすべき仕事をひとつ、ひとつ、しっかりとまわがいがなく片づけていく。この心がけがもつとも尊いのではないだろうか。地位とか、身分とかを願うな、といって、それは無理ともいえよう。長にはなる



歩になりきるころ

丸山竹秋

まいと思ふこと自体が、ふつうの人には至難のわざだろうと思ふ。中には、「われ万人の下僕とならん」と最下にあることを念願した人もあるが、ふつうではなかなかできないことである。しかし長たることを目的とするよりも、毎日の仕事をたとえ下積みでもよいから、よろこびをもって、しっかりとやっいていこうという歩のころのほうが、はるかに尊いのである。世間歩がなきや成りたため、のである。

長などという役目は、自分から求め、運動してなるのではなく、自然に他から認められ、推されてなるものである。実力が無いのに長になったところで、苦しいばかりだ。やがて転落が目に見えてやってくる。

ところで、この歩になりきるということ、どつしりとした歩にもなり得ず、吹けばほんとに飛んでしまふ、そうした軽々しい存在になりやすい。

「じつを申しますと、あなたなんか、ここにいってもいなくてもよいのです。できればやめて頂きたいのですが」とまわりの者から、ひそかに思われるようになって、どうしようもない。仕事ができる人でも、ねたみが強かったり、つまらぬことにすぐ腹をたてたり、反抗ぐせが強かったら...：：：そうしたところはそのつど、反省研究して、すこしでも改めていくようにしたいものだ。もちろん能力がないというようでは話にならないから、これも一つ一つ磨きあげていくことにしよう。（『いかに乗り切るか』より）